

自主・創造・根気

第21号

2019. 1. 8

三田市立狭間中学校

明けましておめでとうございます

新たな年、新たな学期がはじまりました。3学期は1年間のまとめの学期であり、次への準備の学期でもあります。学年毎に取り組むべきことは違いますが、授業や学級活動など、日頃の教育活動を通して目標を達成してほしいと思います。

1月からは、生徒会活動も後輩に引き継がれます。2年生が中心になって各専門委員会を盛り上げ、卒業生や先輩が培ってきた伝統を守りながら、更に豊かで充実した生徒会活動になることを期待しています。

また、卒業する3年生には、9年間の義務教育の総仕上げとして“有終の美”を飾ってほしいと思います。卒業式では、保護者の皆様をはじめ来賓や地域の方々に本校生徒の立派な姿を見ていただけるよう、教職員一丸となって最後まで取り組んで参りますので、保護者の皆様もご協力よろしくお願い致します。

—われただたるし吾唯足を知る—

改めて私たちの生活を見てみると、贅沢を望まなければ必要なものはすべて揃っていることに気づきます。

京都のりょうあんじ竜安寺には、右図のように図案化されたつくばい蹲踞（下写真）があります。周りの「五・佳・止・矢」と中心の「口」を共有



すれば「吾・唯・足・知」となり、「われ、ただ、たるをしる」と読みます。「貧しい人とは、何も持ってない人ではなく、多くを持ちながら、まだまだ欲しいと満足できない人」のことです。足たることを知る人は、不平不満がなく心豊かに過ごします。



*蹲踞（つくばい）：茶室に入る前に手や口を清めるための手水鉢のこと

この「満足することを知る」ということは、幸せに生きる為にとっても大切なことだと思います。年末年始を家族で過ごした皆さんに、今一度感じてほしいと思います。

生きる人の姿勢には大きく分けて二つの生き方がある、と私はよく思うのである。得られなかったものや失ったものだけを数えて落ち込んでいる人と、得られなくても文句は言えないのに幸いにももらったものを大切に数え上げている人と、である。 『地球の片隅の物語』 *「人間の分際」 曾野綾子著から一部抜粋

【 幸せは、自分の心で感じるもの 】

私たちの日常には、小さな喜びや幸せの種も、すでにたくさん隠れているのかもしれない。それを自分がどのように見出していくかによって、毎日はまったく違ったものになるのではないのでしょうか。一つのヒントは「すでに与えられている幸せ」に目を向けることです。

—ビジョンを持つ—

ある建築現場で働く三人の石切工がいた。何をしているのかと聞かれて、彼らは次のように答えた。

第一の男は言った。「これで生計を立てているのさ」

第二の男は手を休めずに言った。「国で一番の石切の仕事をしているんだ」

第三の男は目を輝かせて言った。「国で一番の大寺院を建てているのさ」

まったく同じ作業をしているのに、彼ら三人の目的はいずれも違っていた。

第一の男に見えているのは、あくまで給料である。日々同じことを繰り返すばかりで成長はない。

第二の男に見えているのは、石と自分のことだけだ。専門技能を突きつめることには熱心でも、現場の中で自分の仕事がどのような意味を持ち、現場はどのような方向を目指すべきかといったことに目を向けようとしない。

第三の男に見えているもの、それがビジョンである。彼は常に仕事の意味と目的を考えて日々過ごしている。ビジョンがあれば、自分の仕事に価値を見出すことができ、たとえ仕事がうまくいなくても、ビジョンを共有する仲間と力を合わせて乗り越えることができるだろう。

*『新自分を磨く方法』 スティービー・クリオ・ダービック著・千場弓子訳 より

ビジョンは、物事を成し遂げるためのエンジンとなります。

あなたが今やっていることは、あなたの、あるいはあなたの学級（チーム）のどんなビジョンにつながっているのでしょうか。